「私には恋がわからないのさ」

　これは僕の姉さん、家守虎羽《やもり このは》の言葉だ。

　姉さんは夜中にふらりと散歩に行く趣味がある。普段は一人で誰も起こさないように静かに家を出るのだが、時々僕の部屋のドアを小さくノックして、僕が返事をすると、姉さんは音を立てずにドアを数センチだけ開いて、「散歩行くけど。」と言う。

誘うようにも、ただ宣言しただけとも取れるような、いつもの定型文。気分が乗れば、僕は無言で起きて身支度を始める。そうすると姉さんは、玄関にいるから、と言っていなくなる。姉さんが少しだけ開いたままにした扉をゆっくりと押して、ぎりぎり通れるくらいまで開き、路地裏の細道を抜けるようにして部屋から出る。

玄関で家の扉を開けたま待っていた姉さんと合流して、僕が家を出ると、姉さんが扉を閉める。僕が閉めるとガチャンと音が鳴るからこの役割はいつも姉さんだ。仕事で疲れて寝ているであろう父を起こさないという最大限の配慮からこの散歩は始まる。もちろん、散歩の終わりも父への配慮で終わる。

散歩のルートは、家から少し遠いコンビニエンスストアまでの片道七分ほどの道。その道中では、ほとんどの家の電気が消えている。等間隔で置かれた街灯の明かりはクラゲが浮かぶようにゆらゆらと丸く光り、住宅街は深海のように静かだ。

少し歩くと、姉さんはポツポツと静かな水面に雫を落とすように話し始める。僕も一緒になって話し始めると、水面のゆらぎが大きくなるみたいに少しずつ僕と姉さんは饒舌になる。

　僕はこの散歩の時間が気に入っていた。姉さんとは気を使う間柄ではないからお互いに言葉の隙間を気にしないのは楽だし、悩んでいることを茶化して相談したりしていた。

「悩み事なんて、棒アイスを食えば治るわよ」

　これも姉の言葉だ。

　姉は十の言葉を聞き、一の無意味な格言で返す。真面目に話を聞いているところを見たことがないが、いつもお得意の詭弁でのらりくらりと面倒事を蹴っ飛ばしているのだからすごい。

　そんな姉も、数学という学問に対してだけは正面突破で取り組んでいた。それは単に勉強としての数学との向き合い方を超えて、趣味と言えるほどの傾倒ぶりであった。

　姉は数学の問題を解決することに喜びを感じており、いつも数学のテストはほとんど満点だった。計算ミスをすると姉さんは決まって唇を噛む。

　姉いわく、一番好きなのは証明問題だという。理由を聞くと、問題の作者と語り合っているようで楽しいから、と答えた。変人である。

　姉の数学好きは狂気の域に達しており、小学校時代、アルファベットと数字の形をしたマカロニの入ったABCスープなるものが出ると、器から数字のマカロニを取り出して机に並べて数式を作り出すという珍事を起こし、衛生的じゃないで賞の受賞、副賞として当時の担任教諭から脳天チョップを食らっていたそうだ。

　このときも姉は何やら格言を言ったそうだが、私はこの頃、幼稚園でたけのこニョッキゲームに熱中していたので、その内容について私が知るところではない。

　ある日の散歩道でのことだった。

「姉さんには解けない問題がなさそうだね」

　僕が聞くと、姉は棒アイスをシャクシャクと食べる口を止めて首を横に傾けた。

「数学も棒アイスも、私が望まざるに関わらずトけてしまいます」

「ご自慢どうもありがとうございます」

「いや、今のなし、面白くない」

「むしろ今までのは自信作だったと？」

「もちろんよ。……でも私にだってわからんことがあるのよ？」

「それは初耳だなぁ、一体どんなこと何だろうね」

　姉は少し立ち止まって棒アイスの難所である終盤の一口を器用に済ませ、軽いステップで僕を追い越して物憂げに上を向いた。

「私には恋がわからないのさ」

　そう言った姉の背中を黄色がかった白い街灯の光が照らしている。汗でじっとりと濡れた背中が見えた。

　何と返せばいいか分からず、立ち尽くしているとセミの声だけが僕と姉の間で鳴っていた。

「私にだって人並みの恋ができると思っていたんですよ。でもさ、人を好きになるということは私にはできないんじゃないかと思うんです。こればっかりは計算してもわかりませんね」

「一回計算しようとしていたところは置いておいて、姉さんは見た目は悪くない……というより良い方だから、焦らなくても相手は見つかると思う……よ？」

「私のことをなんにも分かってないのね、あんたは。」

「今のはごめん、真面目に考えてなかった。なんせ僕もコイなんて魚以外知らない」

「煮付けにしたら食べられるらしいから今度近所の川から捕まえてこようか」

　そんなところである。

　これから先の物語を知ったところで、読者諸君が得られるような教訓はない。

　ただ、誰にでもあるような製造過程での欠陥を無遠慮に見つめるだけの物語だ。

　この物語について一言で表すのであれば、姉の言葉を借りてこの言葉で形容する。

「僕は好きがわからない」

　忘れたくても忘れられない後悔というのがある。

　例えばふとした会話の失言。自分から出るはずもないような汚い言葉が違和感なく喉を震わせたときは寝る前に脳内反省会が設けられ、風呂に入ってシャンプーを流しているときなどに不意に思い出されてシャワーの温度を２℃上げたくなる。

　このような例は枚挙に暇がないが、それらに共通するのが、なんでもないような日常に突然幼稚園生くらいの子供を背負ったような重い感覚に襲われるということだ。

　僕の後悔の中でも、思い出すと体中に注射を刺されているような痛みと、空気がすべて煙草の副流煙のような息苦しさに身動きが取れなくなるものがあった。

　彼女のことを好きなのか、嫌いなのかという問いに十年も解が出ていない。

　姉さんの言った、恋がわからないという一言は僕も同じだった。もしいつか好きがわかったときに、好きな人というのがいたと分かるかもしれないが、一緒に仲良く下校して、カビ臭い四畳半の薄っぺらい布団の上で抱きしめ合うまでにどういった過程があるのか分かる日が来るのか、と考えると、そんな日はいつ来るんだと裏拳をいれたくなる。誰に裏拳をかましてやればいいのかわからないけれど。

　一度、ねんごろな相手のいる仲の良い友人に問いかけたことがある。

「君の言う、好きとは一体どういうものなんだ。君が好きだと言って付き合っているその女の子に抱いている感情は本当に好きというものなのか。君は好きという感情を勘違いしていないか」

　結果、それを聞いていた周りの連中に袋叩きにされかけた。

　そこで、僕は好きという感情にある仮説を立てた。名付けて洗脳説である。好きというのはテレビや本などの他の媒体から好きと定義された感情を受信することで、好きという感情が受信者の内部で形成され、受信した媒体で起きたシチュエーションのことを好きと認識するという説である。極論を言えば、幼少期から、ぶん殴りたいと思うということが好きであると言い聞かせれば、好き＝ぶん殴りたいという方程式が出来上がり、お前のことが好きだ！と言いながら取っ組み合いの喧嘩をするのだ。

　それを誰かに話したとしたら、そんなの"好き"ではない、と言うだろう。しかし僕はそんな人に問いかけたい。お前の好きとはなんぞやと。お前の好きが異常でないことの証明をしてみせよ！

　そんなことを考える僕に好きという感情が理解できるはずがなかったのだ。

　僕の家は学校の屋上からギリギリ見えるほどの距離にある。横も向かいも同じ形の家が並ぶ住宅街で、真上から見たら白が大勝したオセロ盤みたいな感じに見えるんじゃないかと思う。

　小学生の頃、一本曲がる道を間違えて他の家に入ろうとしてしまい、鍵が開かなくて大泣きしてそこに住んでいる人を困らせてしまったことがある。外見がほとんど一緒なので区別がつかなかったからだ。

　幼少期のトラウマを思い出して軽く身震いをすると、甲高い音を立てて風が吹いた。先週まではシャツ一枚で登校している人ばかりだったけど、今週に入って一気に上着を着る人が目立った。学ランの襟が顎にあたって痒くなるから冬場はいつも爪を深く切らないと首が真っ赤になってしまう。

　そろそろ爪を切らないとな、と手を前に出して見ると、視界を塞いだ手の奥に人影が見えた。

　手をどけると、見覚えのあるセーラー服の学生が見えた。肩にかかるくらいの髪の毛で、背筋を伸ばして歩くその姿は大上《おおかみ》部長の姿そのものだった。しかし、大上部長の家はこちら側ではなかったはずだ。後ろ姿だけで大上部長だと判断することはできないだろう。何を考えているんだ。

　僕が曲がろうとしている道を彼女が曲がり、僕がそれに続くというのが三度ほど続いた頃、整列した住居たちの壁を打つ激しい音とともに風が走った。背中に張り手をされたような勢いを感じて顔を上げると、数メートル先に歩いている彼女のセーラー服がバサバサと音を立てて風に押された。セーラー服は体の輪郭をはっきりと認識できるほどにまとわりつき、整っていた髪もぼさぼさに崩れてしまっている。

　深海をこぼしたような藍色のスカートは透明な空気の流れを可視化するように激しくうねり、太ももに何度も張り付いた。

　もう一度空気を切るような甲高い音を立てて鋭い風が吹き、少し遅れて弛緩した空気がふわりと舞い上がった。

　その刹那、スカートもそれにつられてめくれ上がり、藍色の奥に淡い桃色が見えた。もっちりとした肌を包む大人びた桃色のシルクの下着は帰宅時間帯の薄暗い住宅街とは不釣り合いで、それがこの艶めかしさを強調している。

　教室で消しゴムを拾おうと屈んだ時に見えた黒。体育座りをして折りたたまれた脚の奥の白。鮮烈な色彩が回想される。

　彼女はすぐにスカートの後ろを手で押さえ、振り返ることなく十字路を曲がっていった。ボクが遅れて同じ十字路に差し掛かり、彼女が進んだほうを見ると数秒前に見たセーラー服と下着が地面に放り出されているのが見えた。セーラー服と下着だけがそこにあった。

　僕は呼吸の順番が分からなくなって唾が変なところに入ってしまい、むせる。

　恐る恐る抜け殻みたいなセーラー服と下着に近づくと、甘いのにさっぱりとした名状しがたい心地のいい匂いを漂わせた衣類があるだけで、他には生の痕跡は存在しなかった。

　濃紺のセーラー服からうっすらと白い水蒸気が立ち込めているのは、いなくなってしまった主人の体温がまだ残っているからなのだろうか。なんて益体もないことを思った。

　周りを見渡しても空気の流れる音しか聞こえない。

　住宅街は不自然なほど静かで、人の気配はない。

　僕は吸い込まれるような感覚を感じ、右手をゆっくりと下ろしてセーラー服に触れる。思ったよりもゴワゴワとしていて重い。とその時、小学生のはしゃぐ声が聞こえた。

　腹を殴られたように心臓が跳ね、思考が高速化する。

　どうする？　この状況を見られたらどう思われる？　そもそも大上部長のような彼女は一体どこに行ったんだ。何かのドッキリだったりしないだろうか。セーラー服に触ってしまった。指紋とか取られて犯人にされないだろうか。これは事件なのか？　もしこれが大上部長の制服だとしたら？

　僕の頭の中には関係あることないことが混ざって暴れていた。僕は訳が分からなくなって、置いていくこともできたはずのセーラー服を急いでバッグに詰めた。

　家はもうすぐそこだ。とりあえず家に帰って、あれこれ考えるのはその後だ。僕は一度も立ち止まることなく、カバンを胸に抱えて家に帰った。

　二階にある自室に入り、カバンからセーラー服を取り出して、ベッドの上に広げる。

　僕はまた吸い込まれるようにかんじて赤いスカーフに触れた。上着とは違ってサラサラしていて、持ち上げても質量を感じないほど軽い。持つ手の力を緩めると、手からこぼれ落ちたスカーフは大の字に置かれたセーラー服の上に音も立てずにふわりと重なった。

　胸の奥がチクチクするような感覚があった。それはセーラー服から僕への攻撃のようだった。このセーラー服をどうしようかと思案していると、不意にドンドンと扉が鳴った。

「ヨウ、貸してた漫画返してくれる？」

　扉越しに姉さんが声をかけてきた。びっくりして心臓が全速力の機関車みたいに駆動している。

「ちょ、ま、まって」

　僕がベッドの上のセーラー服をベッドの下に隠そうとセーラー服を掴むと、外からまた声がかかった。

「何やってんの？　開けるよー」

　セーラー服をベッドの下へ放り込んだのと同時に扉のノブが回った。ベッドの上を見ると、まだ桃色の下着が残っていた。急いで手を伸ばすと扉が少しずつ開いているのが横目で見える。姉さんからベッドの上がすべて見える前に下着をポケットに詰め込み、ベッドの上に座って何事もないような素振りで反対のポケットからスマホを取り出した。

　姉さんは部屋に入ってきて僕を一瞥すると、すぐに本棚の方に向いた。

「野球少年イッキュウ君返してもらうわよ」

　姉さんは僕の返事も待たずに本棚から全十七巻の野球少年イッキュウ君をごっそりと引っ張り出した。

「扉開けてくれる？　両手ふさがってるから」

「はいよ」

「あともうすぐ夕飯だから風呂入って着替えてきなさいな」

「分かったから早く出てってくれよ」

「ごめんね、オトシゴロの男の子だものねぇー」

「なんだよそれ」

「弟の成長が嬉しくも悲しいわぁー」

　姉さんは軽口を叩きながら部屋を後にした。

　姉さんは高校二年生になるというのに、読む漫画も男が好きなような漫画ばかりである。兄の部屋だと言って姉さんの部屋に入れても誰も変に感じないだろう。そのくせ見た目には気を使っているため、姉さんの部屋に姉さんがいると彼氏の部屋に遊びに来た女子みたいに見える。

　姉さんが部屋を出ていったあと、ベッド下で少しホコリをまとったセーラー服を取り出して、とりあえず昨日届いた荷物が入っていた無駄に大きいダンボールにしまいこんでもう一度ベッドの下へ入れた。

　ダンボールから取り出したセーラー服からは金木犀みたいなさっぱりとした甘い匂いが微かにした。濃紺の上着は着古しているのか繊維がところどころほつれていて、首元も毛羽立って少し黄ばんでいる。スカートの表地は上着と同じ布地で、裏地は肌触りがサラサラとしている。真紅のスカーフの薄いナイロン生地にポツンポツンと丸いシミができているのが妙に生活感がある。いつも見ているはずのセーラー服でもこうやってまじまじと見ると急に奇妙なものに見えて来る。

　ダンボールに残った桃色のブラジャーの肩紐をつまんで持ち上げてみる。誰も見ていないとはいえ、無造作に触るのはなんだか気が引けた。大きいのか小さいのかは分からないが、光を艷やかに反射している布は、薄い夏服が雨で透けて見えるものとは違うように見えた。

　ショーツは確か姉さんが来たときに焦ってどこかにやってしまったようだ。さっきは気が動転していたからどこにあるか思い出せない。まあ、そのうち出てくるだろう。

　セーラー服をダンボールに戻し、ベッドに横たわるけど、日付が変わっても眠れなかった。月と街頭の光で青白い視界は別世界のようで、窓の外からは名前も分からない虫が鳴いている声が聞こえる。

　ベッドに横たわっても真下にあるセーラー服が思考にこびりつく。

　いつの間にか思考が混濁している。頭が重い。

　帰り道、蒸発するように消えてしまったセーラー服の彼女は部長だったのだろうか。一つの問いが頭の中でぐるぐると回る。回るけれど答えが出るわけでもない。ただただ回して考えているふりをしているだけだと自問する。

　明日、部室に行けば、部長はいつものように一番日当たりの良い席に座って愛用している中古のライカを眺めてうっとりしている。それでまた冬休みの撮影会の計画を立てるんだ。

　僕はセーラー服のことは考えないようにした。意識的にそう思っている時点で僕の頭の中はセーラー服のことでいっぱいだった。

　暗闇に続く階段を降りているような感覚の後、僕は眠りについた。

「サナ、起きて」

　誰かが私を揺すっている。んにゃ、というみっともない声が出てしまう。恥ずかしい。前を見ると、何やら数字やら記号やらの羅列が書き並べられている。そうだ、今は数学の授業中だった。

　私を起こしたクラスメイトは私の顔を見るなり口元を押さえてフフフと無邪気に笑っている。私の顔って面白いかしら。写真映えしないのよね、なんて思っていると、なぜ笑われているのか私が気づいていないということが分かったみたいで、彼女は自分の頬をトントンと指先でつついて教えてくれる。

「顔拭いて、顔」

　なんだ、と思って制服で頬をぐしぐしと擦ると、真っ白な夏服の袖が黒くなっている。どうやら眠っていたときに下敷きにしていたノートの文字が顔に写ってしまったみたい。シャープペンで書いた数式の一部分が薄くなっている。

　私はプリントの右上の名前欄に書かれた『大上佐奈』の四文字を見て驚く。これは部長の名前だ。机の横にかけられたカバンを探ると、傷だらけなのに新品みたいに綺麗なライカがあった。

　その瞬間、カバンを見るために傾いていた椅子がバランスを崩して倒れた。もちろん座っていた僕も椅子とともに転んだ。ひどい頭の痛みを感じ、頭をさすりながら目を開けると、そこは教室では無く自分の部屋だった。

　僕はどうやらベッドの端で寝ていて、下にあるダンボールを引き出そうとして落っこちたらしい。右手がベッドの下に入っているから多分そうだ。

　無意識にセーラー服に手を伸ばして、部長の夢を見ていた。そんな気持ちの悪いことがあるのか。

　僕はダンボールを奥に押し込んで、制服に着替えることにした。

　学校に着いても、部長が部活に来るかどうかが気になって授業が頭に入ってこなかった。

　授業が終わって、いざ部室に行けるという状況になると、部長がいないという可能性が足に絡まって動けない。手が脂ぎって、唇が乾燥している。とりあえず手を洗おうと思ってトイレに入った。痺れるほどの冷水で手を洗い十秒ほど泡を流す。手を拭こうとポケットから布を出すと、それはいつも使っているハンドタオルではなく桃色のショーツだった。思わず声が出て手を払うと、ショーツは、汚い青色のタイルにハラリと落ちた。なんでポケットにショーツが入っているのかなんてことは思い出せばわかるけれど、そんな思考をするほどの余裕はなかった。ただただ床に落ちた下着を見つめていた。

　外から話し声が聞こえてきて、この状況を見られたら非常に良くないことが起きると気づけた僕は、できるだけショーツに触らないように人差し指と親指で下着をつまんで拾って、できるだけ見ないようにしてポケットに突っ込んだ。濡れた手は空中で振って、ズボンでこすって拭いた。黒いズボンに弱い濃淡が広がってなんとも気味が悪かった。

　数秒すると、大声でトイレに入ってくる野球部とすれ違った。分かるはずもないのに不安になってショーツが入ったポケットを手のひらでなんとなく隠し、教室に戻ってかばんを背負い、部室に向かうことにした。

　部室の扉に触れると、指先に電気が走った。これは感情の隠喩なんかではない、ただの静電気だった。もうそんな時期か、と思う。さっき洗った手から取りきれなかった冷たい水分が熱を奪って、扉にかけた手は少し霜焼けのように赤くなっていた。

　もう一度扉に手をかけて、ゆっくりと扉を引く。奥には部員がすでに揃っているように見えた。部長の姿を除いて。

「お疲れさまです。」

　部室に向かって声をかけると、部員たちが口々に挨拶を返す。

　部室の一番奥にある部長席まで進んで、机の上にライカが置いてあることに気づいた。僕は近くにいた後輩に尋ねる。

「部長は？」

「私もさっき来たばかりなので見てないですけど、カバンがあるのでお手洗いだと思います」

「そう、ありがとう」

　昨日部室の鍵を閉めたのは僕で、その時には部長のカバンはなかった。だからやっぱり部長は誰よりも早く部室に来て、いつものように半笑いみたいな表情でライカを磨いていたんだ。昨日見たのは夢だ。あの制服は明日の燃えるゴミに出してしまおう、そう決めた。

　部長を待って文庫本を読んでいると、一年生が声をかけてきた。

「あの、部活始めないんですか」

「部長が来てから始めようかと思っているんだけど」

「そうですか、分かりました」

　後輩が席に帰って行くと、数人で会話していた後輩が、周囲に伝えるかのように会話の声を大きくした。

「部長ずっといないよね」

「私らが部室の鍵開けたときからカバンあった」

「えっ？」

　疑問符を短く告げると後輩たちは壁掛け時計を見る。

「私達が来たときからだから、最低でも三十分はこのままですよ」

　息が詰まる。なくなったと思った可能性がまた息を吹き返した。ハッと浅い息が短く続いた。

　ポケットの中のショーツが熱を持ったみたいに存在感を増した。

　その日、部長が姿を見せることはなかった。

　次の日も、その次の日も大上部長は部活に来なかった。

　気温はどんどん下がり、秋は乾いた落ち葉が風に舞うように過ぎていった。僕は大上部長がいなくなったあと、徐々に彼女が担っていた役割を背負わざるを得なくなった。

　一週間、たった一週間が過ぎたあと、他の部員たちは大上部長なんて最初からいなかったかのように振る舞うようになった。それは僕も例外ではなく、いつしか不在の大上部長に代わって名実ともに僕が部長の役割を果たすようになった。

ダンボールをベッドの下から引っ張り出し、薄くかかった埃の膜を手で払うと、小指の外側が埃で灰色になった。僕はそれをティッシュで拭ってゴミ箱にぴょいと放る。手を鼻に近づけると微かに梅雨っぽい香りがした。もうとっくに冬になったというのに。

　大上部長、あなたがこのセーラー服の持ち主ならば、僕はあなたの脱皮した皮をかぶったサナギになりましょう。

　ダンボールを封じているガムテープをカッターで切る。切れ味が悪いせいか、何度も力を込めて引かないと切れない。ゴッ、ゴッ、という蟹の足を折るような音を立てながらダンボールを開くと、その中にはちり紙みたいに乱雑に入れられたセーラー服と桃色のブラジャー、ショーツが入っている。その中から上衣を拾い上げると、長さは想像していたよりも短く、肩口から臍のあたりまでしかなさそうだった。それに対してワンピース型のスカートはズッシリとした重みを感じる。目の前にスカートを掲げていると僕の非力な腕が痺れてくる。それらをベッドの上に放り出すと、少し遠い記憶にある、金木犀の香りがした。体がむず痒くなり、気持ちが落ち着かない。

　意味もなく両手を結んでは開いた。手が震えているのはきっと寒さのせいだ。

　セーラー服を着る描写が続く。

　ドアが半開きになっていることに気づかなかった。(姉が見ていた?)

- 大上部長がいないことが騒ぎになり始める。(なぜ行方をくらました？　そもそもそれは彼女の意思？　セーラー服だけ残っていた意味は？)

- セーラー服を着てベランダに出る。

- 深夜にセーラー服を着て外に出る。コンビニの明かりの裏で射精。

- 冬休み。

- 水族館行く。

「洋、私は佐奈ちゃんには会わないほうがいいと思うの」

「…………」

僕は何も言わない。いや、言えない。

「もうやめてよ。どれだけ彼女を傷つければあなたは満足するの？　あなたのその姿、世界で一番醜いと思う。好きだなんて一言も言わずに気持ちだけ引きずり回して、自分はその残像を追いかけて汚い自己満足ばかり発散して、他の人の感情なんて考えたことがない」

「一言、言いたいんだ」

「会ってなんて言うの。」

「気持ちを伝える」

「はぐらかさないでよ。」

「じゃあ、姉さんは大上先輩をはぐらかしてないと言えるの。」

「なによ、それ」

「姉さんの過去を大上先輩に押し付けるのはやめるべきだ。大上先輩は姉さんじゃないし、姉さんは大上先輩ではない。」

姉さんは慕ってくれる大上先輩を離したくないんだ。

そんなことない！ 私は虎羽さんが本当に好きなの！

そうかもしれないわね。

この決断で誰が幸せになるの？

誰も得をしないだろう。

- 家守虎羽の過去

-

- 大上先輩は共感性が強い。

-

「電車が駅を通過する時、今線路に飛び込んだら死ねるんだなぁ……なんて毎日考えることが異常だって気づかなかった。私、それが当たり前だと思っていた。嬉しいことがあったときは通り魔に遭うんじゃないか、なんて思って人通りの多い場所なんて行けなかったし、そこを走る車もなにかの拍子に私の方へ飛び込んでくるんだ、って。日常に死がまとわり付いていたの。」

「高校生が言ってもなんの説得力もないですが、人生になにか大きな意味があるなんて小説の読みすぎだと思いますよ。人生に意味があるというのなら、そこには必ず誰かの意思が介入している。僕はこの考えを大人になっても曲げなくていいことを祈って生きています」

「ねぇ、家守くん」

「なんですか、大上先輩」

「私、君が初めての後輩だったの。ずっと気になっていたのだけれど、私はあなたにとって"良い先輩"だったかしら」

「良い悪いの基準が曖昧ですが、僕にとって先輩は……悪くない先輩、という評価になりますね。"良い"と評価するにはあまりにも先輩らしくないですから。」

「そう。良かったわ。でも私にとって君は、良い後輩だったけれど。」

「それはそうでしょう。そういうところが先輩を"悪くない先輩"たらしめている」

　部室の外からチャイムの音が聞こえてくる。

「もう時間ね。家守くんには百の言葉を使っても感謝を伝えきれないわ」

「伝えきれないのだとしても、何も言ってくれなければただの言い訳です」

「ならそれでも構わないわ」

　先輩はライカを顔の前に構えて笑った。

「私は臆病だから」

　その言葉のあと、シャッター音とともに視界が白で覆われた。

　フラッシュの残像が消えて視界が戻ると、そこにはもう大上先輩はいなかった。

　ただ、あの日のように先輩が着ていた服が所在なさげに落ちているだけ。

　服に近づくこともできずに立ち尽くしていると、ふわりと甘ったるいシャンプーの匂いがした。

先輩は死のうとしている？

「洋、数学で大事なのは解を求めること。解決するにはそれしかない。正解かもしれないし、誤解かもしれない。問題を理解できたのならば絶対に解は出せる。すぐに解を出そうと焦らず、部分点を確実にとること。」

「やめてくれよ姉さん、人生は数学じゃないんだよ」

「じゃあ洋は人生はなんだと思う？」

「人生、は、人生だよ。数学でも国語でも、ましてや道徳でもない。」

言葉がうまく口から出てこない。息が苦しいし、なんだか体がサウナの中にいるみたいに暑い。

一ヶ月

　特に大上先輩にとっては僕がまぶたを閉じて眠るようにして、死を皮一枚まで近づけることができる。

　バカみたいだ。嫌いな人のためにここまでしないといけないなんて。

学校に通うというある種レールに乗った生活から乖離した場所に身をおいて、彼女は救われた？

姉も同じ感覚を経験していて、陰りを抱えていた？

セーラー服を着た僕は先輩を抱擁。

「僕、気持ち悪いでしょ。先輩の服を着て、先輩を抱きしめている変態だ。」

「」

　人生を一つの物語のようなものだと考えるのなら、僕と、大上先輩と姉さんの三人にとって一つの長いエピソードになったこの出来事は、それ以外の人の人生になんの痕跡も残さずに終わっていった。

　大上先輩は高校生活3年間の真面目な学校生活がいい方向に進み、今回の無断欠席は都合よく体調不良と解釈されて単位は一つたりとも落ちることなく、推薦入学のおかげで進路にも何も影響はなかった。

「私の計算に狂いはないの」

姉さんがどうだ、という顔で僕の方を見てニヒルに笑った。

僕はどうなった？

セーラー服を捨てることができず、大人になっていく。

セーラー服を取り出して、ホコリ臭くなったそれをビニールに詰めてゴミに出す。

脱皮。

電話が鳴る。携帯電話の画面を見ると、電話帳に登録されていない電話番号が表示されている。

「久しぶり、洋くん。」

「お久しぶりです、先輩。どうしたんですか夜中に突然」

「そろそろセーラー服でオナニーするのに飽きて新しい刺激が欲しくなった頃かと思って」

「まるで見ていたかのようですね……実はついさっき捨ててきたところなんですよ」

「奇遇ね。私もいま、捨ててきたところなの。」

「そうですか。」

「今は大学生だっけ」

「えぇ、なんとかモラトリアム期間を延長させることに成功しましたよ。先輩は？」

「私は就職が決まって後はのんびりと大学生活を過ごすだけ」

「あの頃と似たような状況ですね」

「また姿を消したら探しに来てくれる？」

「嫌ですよ」

「カレーが美味しい喫茶店があるの。今度行かない？」

「いいですよ。」

「」

人生は大きな事件が起きることなく淡々と進んでいく。大学受験や就職活動、よく聞く波乱万丈の物語は他人事でしかない。多くの人が恋をして、子供を作る。

時が流れるにつれ、少しずつそんな常識が濁っている。